中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1258

「わたしは怒る」と熟考したのちに、自ら願って怒ることはない。また怒り〔自身〕も「われはこれから生起しよう」と意図して生起することはない。

（『入菩提行論』）

△解説▽怒りは何らかの刺激で急に燃え上がる。その際に、私は怒っている、なぜ怒るのかを知ることができれば威力も衰えるのではないか。また、怒りといっても自分のこころのはたらき。実体あるものではない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.19 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1259

勝れたものには嫉妬が生じ、等しい者には仲違いが生じ、劣ったものには驕りが生じ、称賛されると誇りが生じ、非難されると怒りが生じる。

（『入菩提行論』）

△解説▽私たちの自我は、何かあると他と比べては、嫉妬や争いや驕りを作り出す。時には、褒められていい気になり、非難されて怒る。しかし、それらは独りよがりであって、よい結果へとは導いてくれはしない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.20 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1260

問われた人が、〔問われたことと〕別のことを答えず、話をそらさず、怒りや不機嫌をあらわにしないなら、その人は一緒に話すのにふさわしい。

（釈迦）

△解説▽話の応答の仕方で、その人が一緒に話をするにふさわしい人かどうかがわかる。ごまかすことなく、真摯に対応し、理解してくれる。的確に、嫌なことでも不機嫌になったりせずに、答えてくれる人がいい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.21 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1261

時が到来して初めてなされる努力は、じつは、なすべきことをなさないのです。あらかじめなされる努力こそ、なすべきことをなすのです。

（『ミリンダ王の問い』）

△解説▽苦しみの克服は、苦しみが生じてから実践すればよいのでは、という問いに対する答え。喉が渇いてから井戸を掘らせる、空腹になってから田を耕し稲を植えることは正しくない。それでは自分の役には立たない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.22 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1262

師（ブッダ）の教えは、実践を根本とし、実践を神髄とするものです。実践が隠没しない限り、ブッダの教えは存続します。

（『ミリンダ王の問い』）

〈解説〉教えとは道として捉えることができる。煩悩を根絶するための実践の道。歩む人がいる限り道となる。学び実践することで、教えは命を与えられ生き続け、実践する者を正しく導き、教え自体も存続する。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.23 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1263

人の言は須らく容れて之を択ぶべし、拒むべからず、又惑うべからず。

（佐藤一斎）

〈解説〉江戸後期の儒学者のことば。他人の言うことはぜひとも耳を傾けたうえで、その善しあしを選択すべきである。内容を理解もせずはじめから拒んだりしてはならない。また、その言葉にむやみに振り回されて戸惑ってもいけない。それができるには、確固たる自己をもっている必要がある。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.24 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1264

財欲と色欲（性欲）というのは、たとえば、子供が刀の刃についた蜜をなめるようなものである。一なめして足らずに、さらに蜜をなめて舌を切り、痛さで苦しむ姿に似ている。

（『四十二章経』）

〈解説〉欲望が独り歩きすると、自分を見失う。そして、適度な「いいかげん」がわからなくなり、気づいたときには自らを苦しめる状況になっている。欲望の怖いところ、注意点である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.25 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1265

不殺生によって殺生が捨てられるべきである。不偸盗によって偸盗が捨てられるべきである。真実語によって妄語が捨てられるべきである。不両舌によって両舌が捨てられるべきである。

（釈迦）

〈解説〉殺さないことで殺生が、盗まないことで偸盗が、真実を語ることで妄語が、他人の仲を裂かない言葉で両舌が捨てられる。これら善き行為によって誤った行為が消えていく。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.26 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1266

もしも自分が愛おしいものだと知るならば、自分を悪と結びつけてはならない。悪いことをする人が楽しみを得るというのは、容易ではないからである。

（釈迦）

〈解説〉誰にとっても自分が愛おしい。これは当然のことで、まず認めなくてはならない。だから、自ら悪い行いをするならば、その人は自己を愛していないことになる。自己を愛していない人が安楽を得るのはむずかしい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.27 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1267

欲望は骨鎖のようだ。

（釈迦）

〈解説〉欲望は時として自分を苦しめる。欲望を例えて次のように言う。鎖のようになった骨を飢えた犬に与えると、犬は骨にしゃぶりついて放さない。犬は飢えをみたそうとするが、それに執着しているかぎり満腹感は得られない。ますます飢え、疲労困憊して、悩み苦しむことになる。さらには、その骨で口の中を切り痛い思いをする。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.28 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1268

われわれ人間存在の根底には欲望、貪欲が潜在する（妄執）。それにもとづいて、執着が起こる。そのために諸々の危難が起こる。それ故に苦しみがつき従う。

（中村元）

〈解説〉苦しみが生じる道筋について、仏典の教えをもとに分析し整理して説明していることば。欲望は悪い方向に発展すると、最終的にさまざまな危難を生み、苦しみへと導いてしまうことになる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.29 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1269

火をつけた草のたいまつは、それを持っている人を焼くが、それを放した人を焼きはしない。もろもろの欲望はたいまつに喩えられる。欲望は、それを放さない人々を焼く。

（釈迦）

〈解説〉欲望を草のたいまつに例えて言う。大切なのは、燃えさかっているときに、危険だと気づくことと、気づいたならためらわずに放すこと。「もう少し」と考えていると、結局は自分自身を焼いてしまう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.30 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1270

すべての宗教の本質の増大は、多種の方法によって起こるが、その根本は、言葉を慎むこと、すなわち不適当な機会において自己の宗教を賞揚（しょうよう）したり、他の宗教を非難したりしないことである。

（アショーカ王）

△解説▽諸宗教が共存し本質を発揮するには争うべきでない。口を慎まなくてはならない。やたら自己の立場が勝（すぐ）れているとか、他が劣っていると非難しないことが重要。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.5.31 中村元記念館協力